

## デューイ「学校と社会」 第5章 フレーベルの教育 岩波新書 1957. 7. 25

「フレーベルの教育思想の主唱者」(p122)として、「4歳の子どもたちに対すると同様の信念と真摯さをもって12歳の子どもたちにもこの原理を適用」するシカゴ大学付属小について述べている。この原理とは、「1 学校の第一の仕事は、協同的・相互扶助的な生活の仕方について子どもたちを訓練」しようとする事(p121)、「2 すべての教育活動の第一の根源は子どもの諸々の本能的・衝動的な態度および活動に存する」ということ(p122)、「3 これらの個人的な傾向並びに活動は、…成熟した社会の典型的な営為および仕事を子供の段階において再現することを意味するのであること。そしてまた、子どもは生産と創造的な仕事を通じて価値ある知識を獲得し、確保するものであるということ。」(p122)の三点である。

しかし、デューイはフレーベルの論理をそのまま用いようとは考えない。ある種の変更を加えることを必要だと考えているのである。例えば、遊戯について、フレーベルは恩物を開発したが、デューイは「遊戯」は子どもの外面的な所作を指すのではなくて、子供の心理的態度を指すもの(p124)であり、「規定された方式、すなわち恩物・遊戯・または作業の既成の組み合わせにしたがう必要からの完全な解放」(p124)の必要性を説く。「かれが集成した遊戯に文字通り固執することによってよりはむしろ、それぞれの時代時代の状態および活動についての自分自身の研究をつづけることによってフレーベル継承を展開すること」(p126)を望んでいると捉えているのである。フレーベルの理論には、そうせざるを得なかったドイツ社会の背景などがあるととらえている。

また幼稚園教育には「子どもが現実的な事物をとりあつかったり、現実的な行為をしたりすること」を避ける傾向がある(p128)が、これに対してデューイは反対の立場をとる。象徴を扱う場合には、「象徴される現実はまだ子ども自身の理解・味得する能力の範囲内に存しなければならぬ」(130)が、「表現せられている真理或いは現実が子どもの能力の及ぶ範囲をはるかに越えているから、象徴のつもりのもので子どもにとっては少しも象徴ではないのである。それはまったくそれ自身一つの現実的な事物なのである」(p130)。そのため「精神上の諸々の真理を教えていると思っている場合には、じつはしばしば、不誠意を教え、感傷主義を注ぎ込み、また感覚主義を育成」(p130)することになる。だから直接的な体験を重視するのである。教材にも同様の立場で述べている。教材が広すぎると象徴的になる(p131)ことから、「子ども自身の知的態度に好ましくない反作用を及ぼす危険がある。純然たるまねごとのやり方でかれこれ全宇宙の巡覧をしてしまっていると、子どもはうんざりして、直接経験の単純な事物に対する自然な渴望を失っているので、小学校の第一学年の教材に接しても、そんなものはみんなちゃんと知っているという気持ちを抱くのである。(p131)」

子どもを統一の内部で活動させる(p133)ことにより「種々なる側面を提供するけれども、それらの種々なる側面を、相互に関連させて、まとまりのあるものとするのである。(p133)」

方法については(p134)、幼児が非常に模倣的であり、暗示を受けやすいことを危惧し、模倣によって生み出されるべきものではないとする。あくまで活動の動機は子供の中から生まれることが必要であり、模倣や手本は「自分が真に欲しているものはなんであるかをいっそう明確に心に描き出す仕事…を、子ども自身が成し遂げるのを援助してやる目的で供給されるべきものである。その価値は、行動において模倣すべき模範たるところにあるのではなくて、概念を明瞭・適切ならしめるための案内者たるところにあるのである」(p134)。模倣は援助のためであり、手引きするものではない。児童が自分なりの発想を持ちうることができなければ、その模倣の活用は誤りだと述べている。